

# 早期英語教育における CLIL（内容言語統合型学習）と 大学院生による実践報告

相羽 千州子<sup>1)</sup> 坂本 孝之<sup>2)</sup> 王 一南<sup>2)</sup>

(<sup>1)</sup> 外国語学部英米語学科、<sup>2)</sup> 言語文化研究科)

CLIL in Early Childhood Education and Practice Report by Graduate Students

Chizuko AIBA<sup>1)</sup>, Takayuki SAKAMOTO<sup>2)</sup>, Yinan WANG<sup>3)</sup>

(<sup>1)</sup> Department of English Language Studies, Faculty of Foreign Language Studies

<sup>2)</sup> Master's Program in Japanese and Japanese Language Education, Graduate School of Language and Culture Studies

<sup>3)</sup> Master's Program in English and English Language Education, Graduate School of Language and Culture Studies)

目白大学大学院の授業科目「早期英語教育学」は、早期英語教育に関する理念、概要、教授法・指導法、授業実践、教室内活動などを学ぶことを目的とし、その運営には特に、実践授業を体験しながら、授業を計画し、指導法を考えていく手法を取り入れている。2016年度は、第1筆者が公立小学校で実践しているCLIL実践を体験した大学院生が授業計画を立て、模擬授業を行った。この報告では、まず、CLILの概要、日本の小学校での英語教育におけるCLIL導入の意味などについて説明する。次に、CLILの実践授業をどのように捉え計画をしたか、その手順、内容、活動、および模擬授業の様子について記す。さらに、授業で計画した内容に手を加え、実際に教育現場で行った際の生徒の様子、授業後のアンケートの結果などについても報告する。最後に大学院教育における模擬・実践授業の展望について述べる。

キーワード：CLIL、早期英語教育、小学生、授業実践、EFL

## はじめに

目白大学大学院では、「早期英語教育学」という授業科目が開講されている。2016年度後期に第1筆者が担当したクラスでは、特に、日本の小学生を対象とした早期英語教育に焦点を当て授業を進めた。大学院生が体験した様々な教授法・指導法の中の一つにCLIL（Content and Language Integrated Learning：内容言語統合型学習）の実践があった。大学院生がCLILに強い興味を持っていたこともあり、CLILの授業計画と模擬授業、それに伴うレポートの提出を課題とした。ここでは大学院生2名が試

みたCLILの実践授業についての事例報告を行う。

本稿では、まずCLILのフレームワークなどについて概要を説明した上で、日本の公立小学校における英語教育とCLILの実践授業の可能性について論じる。次に模擬実践授業についてその手順・内容などを報告し、大学院教育における模擬・実践授業の有用性について展望する。

## 1. CLILについて

まず、CLILとはどのような指導法であるかを始めに述べることにする。以下は、CLILの定義として最もよく引用される一節である。

CLIL is a dual-focused educational approach in which an additional language is used for the learning and teaching of both content and language. (CLIL とは、追加言語を使用して、内容と言語の学習と指導が行われる。内容と言語の指導過程において、焦点が内容と言語に当てられるという意味で、いわば二重焦点の指導法なのである。筆者訳)

(Coyle, Hood & Marsh, 2010, p.1)

この定義における「追加言語」とは、学習者の外国語のほか、第二言語や地域の伝承語や地域語などの場合もあるとされる。しかし、現状で最も多くの場合、CLIL とは、科目学習あるいはテーマ学習と外国語を統合して行う指導法であると考えて良いだろう。

CLIL という用語は 1994 年ごろから欧州で使われるようになった。もっとも、内容と言語を統合させる学習形態の起源は古く、5000 年前の現在のイラクあたりで初めて見ることができると言われている。また、ラテン語の普及と共に、何世紀にも亘り第二言語を使って内容を教える指導法が欧州で普及した。この指導法は CLIL に類似してはいるが、ラテン語は実際の生活で使用されていない言語である点が CLIL との大きな相違点である (Mehisto, Marsh & Frigols, 2008 ; 笹島, 2011)。

欧州で CLIL が普及した背景には、EU (Europe Union : 欧州連合) の統合がある。欧州の人々は、域内統合が進むに連れて、複数言語の使用や異文化への理解が必要となった。EU は「母語 + 2 言語」という言語政策を提示し、実践的なコミュニケーション能力の育成を図る指導法として CLIL が普及してきた (池田, 2011 ; 笹島, 2011)。

## 2. CLIL のフレームワーク :4C

CLIL は 4C と呼ばれるフレームワークを備える。4C とは、Content (内容)、Communication (言語)、Cognition (認知・思考)、Culture (文化) である。あるコンテキストの中で、これらの要素はお互いに関連しながら内容と言語の学習を統合する (Coyle et al., 2010, p.41) (図 1)。

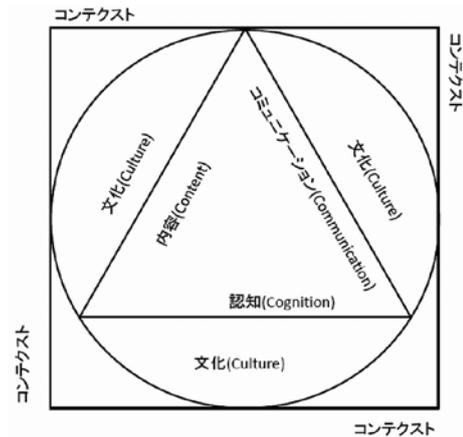


図 1 4C フレームワーク  
(Coyle et al., 2010, p.41 より作成)

これらの要素をもう少し詳しく説明する。Content とは内容を指し、理科、社会、家庭科などで学ぶ教科内容や、地球温暖化や熱帯雨林など、テーマに関する内容のことである。Communication とは言語を指し、3 種類の言語に分かれる (図 2)。Language of learning (学習の言語) は、科目や主題テーマに関する基本的な概念や技術を学習者が使えるようにするために必要な言語であり、Language for learning (学習のための言語) は、外国語の学習環境の中で学習者が運用することが求められる言語であり、Language through learning (学習を通じた言語) は、授業中の対話を通じて新しく生まれた言語である。



図 2 CLIL のコミュニケーション  
(Coyle et al., 2010, p.36 より作成)

Cognition とは、認知・思考を指す。思考プロセスには 6 段階がある (Bloom, 1956)。それらを大

別すると、記憶、理解、応用からなる低次思考力 (LOTS: Lower-Order Thinking Skills) と、分析、評価、創造からなる高次思考力 (HOTS: Higher-Order Thinking Skills) に分けられる (図3)。

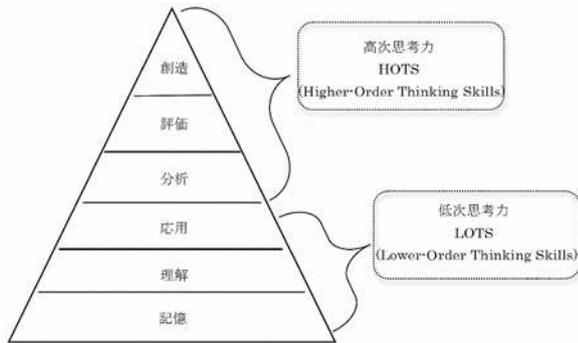


図3 Bloom の分類 (修正版)

(Anderson & Krathwohl, 2001, pp.67-68 より作成)

Culture とは、文化を意味するが、4C のこの部分を Community と捉える考え方もある。前掲した図1が示すように、Culture は Content、Communication、Cognition の他の3要素に関連し、学習者や他者との関係性の中で重要であると考えられている。欧州ではEU 統合により異文化・異言語への理解と敬意が必要とされてきた。しかし、池田 (2011) は日本の学習環境では、多民族、多言語、多文化からなる共同体が相対的に少なく、Culture よりも Community (協学) の方が馴染むと述べている。この場合の Community は図4のようになる。

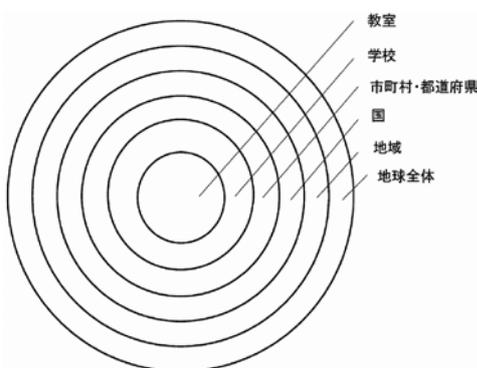


図4 CLIL における Community の概念  
(池田, 2011, p.9 より作成)

以上、CLIL の4C を個別に説明してきた。CLIL の画期的な点は、4つのCを「有機的に結びつけパッケージングした点にある」(池田, 2011, p.5)。前

掲図1からわかるように、このパッケージはコンテキストの中に埋め込まれている。次は、CLIL の実践されるコンテキストに目を移し、日本の小学校英語教育を検討する。

### 3. 日本の公立小学校での英語教育と CLIL 実践の可能性

日本の公立小学校での英語の導入は、時間数の確保、指導教員など多くの問題を抱え、賛否両論が激しく議論される中で始まった。2011年度より小学校5・6年生で年間35単位時間数の外国語活動が必修化された。先行実施が2008年から始まったことを考えると、約10年が経過しているが、当時の問題は未だ解決されていない。2020年度からは小学校5・6年生で英語が教科(外国語科)となり年間70単位時間、3・4年生では外国語活動が必修となり年間35単位時間が実施される。指導教員は専科教員ではなく、引き続き担任教員が担う。現在、日本の公立小学校の授業スケジュールはすでに満杯であるが、新体制のもと、3年生から6年生まで年間35単位時間数を英語に捻出する必要がある。その対策、とくに5・6年生では、増加時間は、短い時間を数回に分けて組み入れていくモジュールでの授業が提案されている。このような状況で実施されている日本の公立小学校の英語教育に欧州で生まれたCLILをどのようにして取り入れることができるのかを考える。

内容と言語を統合した教授法には、CLILの他に北米で実践されているCBI(Content Based Instruction: 内容中心教育)がある。しかしCBIは、学習環境や言語、指導者などの点で、CLILとは異なる。欧州で普及したCLILはEFL(English as a Foreign Language)の環境下で実践され、教科教員や担任教員など、非母語話者が担当していることが多い。他方、CBIは、ESL(English as a Second Language)の環境下で実践され、科目教育を主に母語話者が教えている。日本の公立小学校は、EFLの環境下であり、また指導者が非母語話者の点など、北米のCBIの教育環境よりも、欧州のCLILの環境と類似する点が多い。また、日本の公立小学校では、新体制でも専科教員ではなく担任教員が英語を

担当することが予定されている。担任教員は他教科を担当しているため、他教科の知識も豊富である。このような点から、日本の公立小学校は欧州で普及したCLILに親和性を持つと考える。日本の小学校での最大の問題である時間数確保の問題も、他教科の内容と英語を統合することにより、英語の授業数増加による、他教科への影響などを、多少なりとも緩和することができる。

目白大学大学院の「早期英語教育学」の授業にCLILの実践授業を取り入れたのは、今後、日本の小学校において、CLILが導入される可能性の高い指導法と考えられるからである。

次に、大学院生2名が考えたCLILの授業計画・模擬授業などについて紹介する。

#### 4. 理科を取り入れたCLILの授業計画

目白大学大学院の「早期英語教育学」におけるCLILの授業を通して修得した知識を基に、授業の一環として、実際のCLIL授業計画の作成を実施した。以下に、その設計方針、設計手順、内容及び活動について詳細を記述する。

##### (1) CLIL 授業の設計方針

CLILの授業は、「4つのC」を基にして、授業内容を統合的に検討し作成することが必要である。最初は、「Content」。これは授業にて扱う科目やトピックのことである。次に、「Communication」。これは、授業で使用する単語・文法・発音などの言語知識や、読む・書く・聞く・話すといった言語技能のことである。次は「Cognition」。これは、授業を通して様々な思考を促すことである。最後に、「Community、またはCulture」。これは、授業において協同学習(グループワーク)や異文化理解を取り込むことである。また、具体的には、以下の10項目を満たすように、授業設計をすることが必要である(池田, 2013, p.13)。

- ①内容学習と語学学習の比重を等しくする。
- ②オーセンティック素材(新聞、雑誌、ウェブサイトなど)の使用を奨励する。
- ③文字だけでなく、音声、数字、視覚(図版や映像)による情報を与える。

- ④様々なレベルの思考力(暗記、理解、応用、分析、評価、創造)を活用する。
- ⑤タスクを多く与える。
- ⑥協同学習(ペアワークやグループ活動)を重視する。
- ⑦異文化理解や国際問題の要素を入れる。
- ⑧内容と言語の両面での足場(学習の手助け)を用意する。
- ⑨4技能をバランスよく統合して使う。
- ⑩学習スキルの指導を行う。

##### (2) CLIL 授業の設計手順と内容

前項のCLIL授業の設計方針を基に作成した授業の具体的な設計手順について記述する。

まず、Contentとして、授業のテーマについて、実際の小学3年生の理科の教科書から具体的な内容「こん虫のからだを調べよう」(学校図書, 2012, pp. 54-61)を選択した。選択した理由としては、こん虫は小学生が身近で興味を持っているものであり、後で実際にこん虫に出会ったときなどに、本授業を思い出す機会が多いのではと考え決定した。次に、授業全体の構成と進行を決めた。授業時間は全体で45分として、各項目の時間配分を決めた(表1参照)。

表1 授業の進行

NO	時間(分)	内容	備考
1	1	挨拶、導入	
2	10	(チャンツ)虫の絵を見せて、虫の名前について話す。	絵カード(5枚)
3	15	グループワーク(6グループ*5人)。 2つの絵(こん虫、他の虫)を比較しながら、こん虫の体の特徴を話し合う。 話合った結果をグループごとに発表する。	2つの絵を各グループに配布
4	5	こん虫のからだの仕組みの説明(教師)	説明用の絵
5	10	(文字指導) こん虫の絵と英語マッピングテスト	1. マatchingテスト 2. 英語→絵を描く
6	4	振り返り、終了挨拶	振り返りよう質問用紙
合計	45		

次に、Communicationとして、授業で使用する英語(Language of Learning, Language for Learning)を検討し、絵カードやチャンツを考案

した。絵カードには実際の写真やイラストを使用した。絵カードで見せるこん虫の英語名称やこん虫の動作、例えば蝶々 (butterfly) や飛ぶ (fly) を Language of Learning とした。

Cognition としては、グループワークを取り入れた活動を考えた。こん虫の絵とこん虫以外の生物の絵を比較して、こん虫の特徴を観察し、グループ全員で話し合う活動である。教師が一方向的に説明するよりも、議論や思考を伴うので内容が記憶に定着しやすいという学習効果を狙いとした。また、グループ活動により様々な意見を話しあうため Community の要素が取り込まれるようにした。

### (3) CLIL 模擬授業の実施とその感想

作成した CLIL 授業計画および教材（絵カード等）を使用して、目白大学大学院の授業において、模擬授業を実施した。実際の授業では、生徒数 30 名、小学校教師及び ALT 各 1 名の想定である。

模擬授業の内容としては、まずこん虫の絵カードを見せながら、こん虫の英語名をチャンツを用いて話させた。次にグループワークとして、こん虫とそれ以外の虫の絵からこん虫の特徴を調べる活動を行った。文字指導については、こん虫の絵と英語名をマッチングさせるテストや英語名からこん虫の絵を書く問題を提示した。

以下は、CLIL 実践の模擬授業を通しての感想である。レッスンプランの構成については、限られた授業時間（45 分）のなかで、授業内容をどのように時間配分するのか難しい。また、小学生 3 年生が対象とのことで、飽きさせない工夫（チャンツ、替え歌等）について十分に考慮しておく必要がある。英語の教案作成については、学習者（今回は小学 3 年生）のレベルに合わせた英語の単語・文法・表現（言い回し）を使用するように考慮する必要がある。これは言うほど簡単ではなく、経験を重ねることにより、学習者に対して無理のない英語を使えるようになるのであろう。また、科目学習（理科）の内容を英語で授業することにより、従来の英語学習（言語教育）に提示される対象と比べて、学習者には真正でより興味のある対象に関する英語であると認識され、言語学習が促進されると思われる。これは CLIL の特徴であるが、本模擬授業を通して体験す

ることができた。

最後に、CLIL に限らず第 2 筆者自身、英語教育の指導経験が全くなかったため、試行錯誤の連続であったが、非常に有益であった。春学期の授業（言語習得論）でも CLIL の概要の授業があったが、本授業で実際に児童向けに CLIL 授業を設計したことにより、CLIL の本質を実感できたような気がする。CLIL の概念を理解するのは、非常に良いプロジェクトワークであると思う。このような形態のワークショップを開催することにより、CLIL の認知度も向上していくのではないかと思われる。

## 5. 健康のテーマを取り入れた CLIL の授業計画

### (1) CLIL 授業の計画手順と内容

健康をテーマに計画した内容は『The CLIL Resource Pack』第 2 単元「Food and Health」の第 1 課 a の「How do you keep healthy?」(Grievesson & Superfine, 2012, p.24) を参考にして考えたものである。このテーマの目標は運動と食品の重要性を健康面から再認識することを目的とした授業である。小学 5 年生を対象とし、実施時間 45 分の指導展開は以下の通りである。

作成した指導案（表 2）に沿って、目白大学大学院の授業で模擬授業を実施した。活動を通じて運動や食品や健康面などに関連する語彙をはじめ、「Eating/drinking ( ) is good for me. (～を食べる / 飲むするのが私の体にいい.)」、「( ) makes me healthy. (～することが私を健康にする.)」という表現を学習者が上手に英語で言えるようになり、Cognition には低次思考力から高次思考力までの各段階を取り入れた指導をした。特に、チームワークでアンケート調査の結果を分析し、話し合った後、健康作りポスターを作成させ学習者に思考過程の定着を図ることにした。

### (2) CLIL 模擬授業の実施とその感想

実施対象が小学校 5 年生（24 人）の設定である。始めに児童たちに飲食物が書かれたプリント 1 を配布し、好きなもの、嫌いなものを確認した後、教員がそれらの中で健康食品と非健康食品をピック

アップする。次に、新たなプリント2を配布し、児童たちにどのような運動をしているのかを尋ねる。それから、アンケートを配り、生徒同士に英語で質問させ、お互いの結果を記入させる。再びプリント1、2に基づいて、健康を維持するため、どうすればいいかを考えさせ、最後に、個人とグループで健康作りポスターを制作させ、一人ずつ発表した上でクラス掲示用とする活動内容である。いろいろな教授・指導法を行ったことがある第3筆者にとって今回の模擬授業はCLILの魅力を見つけたよい機会であった。与えられるテーマに関する内容を習得する過程でそれぞれの学習者が他者と共に異なる言語の学習に取り組み、目標を達成するためにはチーム

ワークが欠かせないことをCLILの授業で実感させることができた。小学校教育現場では低学年より高学年のほうが集中力が高められているとよく言われているが、海外日本人学校の小学部を担当したことがある筆者からするとそれは常に正しいと言いきれない。このことから、学習する内容を学習者によく認知させ、考えさせるため、Cognitionの6段階について特に入念に指導しなければならないと気づいた。これらによって、指導案、プリントを作成するに当たり、習得する言語で発表活動を行わせれば、学習者が最終的にコミュニケーション能力を発達させられるはずである。

表2 レッスンプラン

Teacher's Guidance	
Warm-up (5min.)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Display the worksheet 1 and ask the students which types of food/drinks they would like to eat/drink. Then name the healthy/less healthy food and drinks.</li> <li>• Show worksheet 2 and ask students what exercise they do every day.</li> </ul>
CLIL Lesson	
1) Procedure 1 (5min.)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Firstly, hand out the questionnaires. Secondly, have the students work in pairs to find out if their lifestyles are healthy or not. Lastly, have the students write down their partner's answers.</li> </ul>
2) Discussion 1 (5min.)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• According to the results, have the students make a discussion based on whether or not their class-mates are healthy.</li> </ul>
3) Discussion 2 (5min.)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Show the worksheet 1&amp;2 again. Then, ask the students to find ways to stay healthy and keep fit.</li> </ul>
4) Procedure 2 & Presentation 1 (15min.)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Hand out worksheet 3 and ask students/each group to design and make posters to show how they can achieve the goal (healthy life). Finally, display the posters in the classroom.</li> </ul>
5) Presentation 2 (8min.)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• In order to review new words, show PowerPoint slides and give quizzes.</li> </ul>
Reflection (2min.)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Have the students write some comments.</li> </ul>
Teaching goods	(1) computers (2) worksheets (3) glue sticks (4) scissors

### (3) 高校生クラスでのCLILの授業応用

作成した授業計画(表2)は目白大学大学院で早期英語教育の授業にて模擬授業として実施されたが、学校教育現場で勤めている第3筆者は、大学院で習ったCLILの授業計画を活かして自分が担当している特進クラス(高校2年生)にて、生徒たちの

了承を得た上でCLILの実践授業を行った。

当該クラスは外国語学習意欲が高くなく、英語が苦手な嫌いな生徒が数名いる。また、学年が上がれば上がるほど英語の発表活動中、恥ずかしがる生徒が増えていく傾向になっている。そこで、実際にCLILの授業で、予めグループを分け、それぞれ

の班に英語が得意な生徒にリーダーシップを発揮させ、グループ活動の活性化を図ることにした。

授業前半では、クラスで健康に関する食べ物や運動についてのアンケート調査後、ディスカッション1、2（表2）を行なわせたが、英語よりやはり日本語での話し合いが多かった。しかし、普段英語に全く興味がなかった生徒、英語の成績が芳しくなかった生徒でさえ、英語で簡単な質問 Do you eat breakfast? / Do you eat snacks? / Do you exercise or play sports every day? などに回答ができ、それによりできるという自信を持って、学習に取り組んでいた。これは、生徒たちの英語学習意欲が高められている兆しである。CLILは、学年に限らず基礎的・基本的知識、技能の土台が弱そうな学習者にとっても有意義な指導法ではないかと思う。

授業後半では、今回の学習活動を通して最終的にポスターを作らせ、それに基づいてグループなり個人なりの発表をさせる指示を出した。ワークシートに明記されている Any ideas? に対して生徒全員が積極的に自分なりの考えをピックアップし、素晴らしいポスターを仕上げた。プレゼンテーションは、恥ずかしがってできない生徒もいたが、授業中、生徒たちが非常に協力し合い、楽しそうに意欲的に授業に参加していた。

今後の参考として授業後匿名のアンケート調査を行った。7種類の質問を5段階で評価してもらい、最後に自由記述の感想を書いてももらった。当日は13人が回答した。アンケート項目でCLILに関連する質問と生徒の回答をここで紹介する。「内容が分かりましたか」に対して、「そう思う、ややそう思う」7名、「どちらとも言えない」3名、「あまりそう思わない、そう思わない」3名であった。また、「英語が分かりましたか」と言う質問に対しては、「そう思う、ややそう思う」4名、「どちらとも言えない」5名、「あまりそう思わない、そう思わない」4名であった。「難しかったですか」に対しては、「そう思う、ややそう思う」5名、「どちらとも言えない」4名、「あまりそう思わない、そう思わない」4名と答えている。「英語でコミュニケーションを取ろうとしましたか」に対しては、「そう思う、ややそう思う」4名、「どちらとも言えない」7名、「あまりそう思わない、そう思わない」2名と答えている。それぞ

れの質問に対して「どちらでもない」という答えが多かったが、感想の中には、「毎日今日みたいな授業を受けたい」「(今回のような) もっと楽しい授業を受けたい」のような意見も書かれていた。これは日々、受験勉強に追いこまれている生徒の本音だと思われる。言語教育の歴史を振り返ると、数えきれないほどの教授法・指導法が存在している。その中で、CLILは教える側も学習する側も能力の向上が期待できる指導法の一つであると実感した。

## 7. 展 望

本稿では、目白大学大学院の開講科目「早期英語教育学」の一環として、科目学習（理科）の内容と英語、テーマ（健康）と英語を統合した大学院生のCLIL授業の試みを報告した。試行錯誤を重ねて、授業計画を作成し、模擬授業を行った2名の大学院生は、両者とも今回初めてCLILの授業計画・教材作成、模擬授業を行ったが、CLILの授業を創りあげていく過程で得たものは多かったと述べていた。本稿1、2章のまとめではCLILの学習者の言語や認知の発達に重きを置いて解説したが、大学院生の感想が示すように、授業計画・実践・振り返りのプロセスを通じ、授業者自身が新しい発見に出会う機会が相対的に多いこともCLILの特徴の一つである。

本稿の事例報告は、英語教育の大学院教育の今後のあり方について考える上で、一つの基礎資料にもなる。教育理論の理解にとどまらず、授業計画や模擬授業を大学院生自らが行ってみる経験は、教育実践家を目指す大学院生はもちろんのこと、教育研究者を志す大学院生にとっても良い影響をもたらすと第1筆者は考える。教育研究は、多かれ少なかれ、研究者自身の教育観がそれぞれの教育環境の中で問い直されるという性格を持つからである。

その意味で、第3筆者が自身の教える教育現場（高校）への応用を報告したことは一つの方向性を示している。「早期英語教育学」のクラスでは、私立小学校での授業参観の機会を設け、CLILの実践授業観察などの機会を与えているが、その場合、研究者として外側から授業を客観的に分析することになる。他方、今回のように、研究者自身が teacher

as researcher として授業を計画・実践し、その後で自分の授業を内側から振り返る機会が持てるならば、授業はもちろん、研究についても単なる観察とは違う知見が得られることになる。大学院教育をより一層充実させるためにも、大学院生が実際の教育現場で授業実践を行えるようなバックアップも必要であろうと考える。

CLIL は日本でも徐々に広まりつつあるが、未だにその認知度は低く、実践方法がわからないという声を多く耳にする。また、日本の公立小学校において CLIL を実践するには、日本の小学生に適した教材が不足していること、CLIL 実践を指導できる人材が不足していることも指摘されている。

第1筆者は長年、日本の小学生向けの CLIL の教材開発や授業実践を行っている。また、公立小学校教員英語研修会などで CLIL の実践紹介・実践指導などにも取り組んできた。CLIL の実践を行った時の児童の反応、担任教員の反応などを見るたびに、今後の小学校現場での CLIL の可能性を実感する。意味のあるコミュニケーション、自律学習、好奇心の刺激など、これからの CLIL の学習に期待ができよう。

## 《引用文献》

- Anderson, L., & Krathwohl, D. (Eds.) (2001) *A taxonomy for learning, teaching, and assessing: A revision of Bloom's taxonomy of educational objectives*. New York: Longman.
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010) *Content and language integrated learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Griveson, M. & Superfine, W. (2012) *The CLIL resource pack*. Surrey : Delta Publishing.
- 日高敏隆他 (2012) 『小学校理科3年生』, 学校図書.
- 池田真 (2011) 「第1章 CLIL の基本原理」渡部良典・池田真・和泉伸一 (共著) 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たなる挑戦 - 第1巻原理と方法』, pp. 1-13, 上智大学出版.
- 池田真 (2013) 「CLIL の原理と指導法」, 『英語教育』, VOL 62 NO.3, 大修館.
- Mehisto, P., Marsh, D., & Frigols, M. (2008) *Uncovering CLIL: Content and language integrated learning in bilingual and multilingual education*. Oxford: Macmillan.
- 笹島茂 (2011) 『CLIL 新しい発想の授業』, 三修社.  
(受付日:2017年10月28日、受理日2017年12月20日)